

Title	サルトルの息子、バタイユ：ボードレールをめぐって
Sub Title	Bataille, fils de Sartre : autour de Baudelaire
Author	石川, 学(Ishikawa, Manabu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.76 (2023. 3) ,p.85- 121
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20230331-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20230331-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# サルトルの息子、バタイユ

## ——ボードレールをめぐって

石 川 学

### 1. はじめに

1943年、占領下のパリで、ジョルジュ・バタイユ（1897–1962）は『内的経験』（*L'Expérience intérieure*）を出版する。これに対して、ジャン＝ポール・サルトル（1905–1980）——同年に『存在と無』（*L'Être et le néant*）を刊行することになる——は、書評論文「新しい神秘家」（« Un Nouveau Mystique »）を執筆する。そこでサルトルは、「無（rien）」や「虚無（néant）」、そして「非＝知（non-savoir）」——認識不可能な「無」や「虚無」に直面する、もはや主体たりえないはずの主体——を「実体化（substantifier）」するバタイユの筆致の「詐欺（supercherie）」を批判し<sup>1)</sup>、さらに、「説教家にして嫉妬家、弁護士、かつ気違い」という雑言を著者個人に投げかけた<sup>2)</sup>。ミシェル・シュリヤのバタイユ伝によれば、バタイユは「サルトルの攻撃的な応答にひどく傷つき」、「この侮辱の埋め合わせを得たいと願った」。とはいえ、「両者の確執は即座で決定的だった」という広範に流布されたイメージは、過度に強調されたものだという<sup>3)</sup>。その証拠として、

- 1) Jean-Paul Sartre, « Un Nouveau Mystique » (1943), *Situations, I*, Paris, Gallimard, 1947, p. 169–170. この主題については、別稿で幾分かの考察を試みた。Cf. 石川学「無とその力——ジャン＝ポール・サルトル「新しい神秘家」（1943年）以後のジョルジュ・バタイユ」、『Résonances』第9号、2015年、108–115ページ。
- 2) Jean-Paul Sartre, « Un Nouveau Mystique », art. cit., p. 135.
- 3) Michel Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre* (1897, 1992), Paris, Galli-

シュリヤは、両者が以後交流を重ねたという伝記的事実に触れている<sup>4)</sup>。バタイユが「1944年2-4月」の「日記」として公にした文章（『ニーチェについて』（1945）所収）には、自宅で友人たちと酒を飲み、カップルたちの真ん中で「哲学者」サルトルと「ぐるぐる回りながら踊った」夜を「楽しく思い出す」くだりがある。そこには、「5ヶ月の悪夢はカーニヴァルになって終わった」との文言もある<sup>5)</sup>。これに、「新しい神秘家」以来、5ヶ月にわたりバタイユを苛んだ傷からの一定の解放を<sup>6)</sup>、両者の「少なくとも表面上」の「和解」を看取することもできるだろう<sup>7)</sup>。また、バタイユは、別の機会（44年5月）を回顧し、「サルトルがそこ [ミシェル・レリスの家] にいた。私は彼に会い損ねていて、会いたいと思っていた」とも吐露している。その場では「コギトについての奇天烈な討論」がなされたということだが<sup>8)</sup>、

---

mard, 1992, p. 409.

- 4) *Ibid.*, p. 410 : 「[...] 1944年にバタイユとサルトルはしばしば会ったし、彼らの見解の相異が実際には薄まらなかったとはいえ、サルトルはこの人物——変わらず気遣いだと思い続けてはいたようだが——に、より注意深く、またより好意的に耳を傾けるようになった」。
- 5) Georges Bataille, *Sur Nietzsche* (1945), *Œuvres complètes*, t. VI, Paris, Gallimard, 1973, p. 90. 以下、バタイユのこの全集版を参照するにあたっては書題をO. C. と略記し、出版地と出版社の記載を省略する。
- 6) 「新しい神秘家」は1943年10月から12月にかけて、『カイエ・デュ・スユド』260-262号に、3回に分けて掲載された。「5ヶ月の悪夢」について、『ニーチェについて』の邦訳者である酒井健は、当該箇所<sup>1)</sup>の註で、「このサルトルの論文に発するバタイユの苦悶と不快を指すと考えられる」と指摘しており（G・バタイユ『ニーチェについて』酒井健訳、「訳注」、現代思潮社、1992年、370ページ）、次註に挙げる澤田直の論考の見解もこの見方に連なる。
- 7) 以下の指摘を参照。澤田直「神秘主義をめぐる——バタイユとサルトル」、『サルトルのプリズム——二十世紀フランス文学・思想論』第5章、法政大学出版局、2019年、102ページ。
- 8) この記述は、『ニーチェについて』の「1944年4-6月 好運の位置」の章の草稿に見られるが、公刊時には削除されている。「コギト」をめぐる討論はバタイユ、サルトル、レイモン・クノー、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの四者で行われ、「サルトルと自分の深い違い」をバタイユに知覚させるものだったという。Cf. Georges Bataille, « Notes » de *Sur Nietzsche*, O. C., t. VI,

こうした展開を見れば、「和解」からさらに進んだ、サルトルとの議論の欲求をある時期までのバタイユに推定しても、間違いにはならないだろう。

両者の交流は、私的な交友関係のみに帰されるものではない。思想交流の面に注目するなら、44年3月5日にマルセル・モレ邸で行われた「罪に関する討論」(*Discussion sur le péché*)での二人の対峙は、やはり重要である<sup>9)</sup>。ここでバタイユが行った口頭発表は、のちに加筆され、『ニーチェについて』第2章「頂点と衰退」として公刊される<sup>10)</sup>。サルトルが向けるのは、「新しい神秘家」に引き続き、バタイユの主張が「虚無」や「空無 (*le vide*)」を「存在」として「現出させている (*faire apparaître*)」という、不在の「実体化」にまつわる批判である<sup>11)</sup>。くわえて、バタイユの「罪」概念が、既成道徳に「罪」と措定されるものを指すかぎりで既成道徳に依存しており、それに既成道徳への異議提起を見出すのは錯誤であって、既成道徳を逆転させた道徳を新たに打ち立てようとする欺瞞に陥っているとも指摘される<sup>12)</sup>。興味深いのは議論の中身ばかりではない。サルトルが整然とした論理によってバタイユから逃げ道をなくす、その冷徹さにもかかわらず、バタイ

---

*op. cit.*, p. 408. なお、この時期にレリス邸でサルトルとボーヴォワールがバタイユと「頻繁に会っていた」事実を、ボーヴォワールが書き残している。Cf. Simone de Beauvoir, *La Force de l'âge*, Paris, Gallimard, 1960, p. 586.

9) バタイユの発表に続いて行われたこの討論には、アルチュール・アダモフ、モーリス・ブランショ、ピエール・ビュルジュラン、ボーヴォワール、アルベール・カミュ、ジャン・ダニエルー、ドミニク・デュバルル、モーリス・ド・ガンディヤック、ジャン・イポリット、ピエール・クロソウスキー、レリス、ジャック・マドール、ガブリエル・マルセル、ルイ・マシニョン、モーリス・メルロ＝ポンティ、ジャン・ポーラン、ピエール・プレヴォ、サルトルらが参加した。バタイユの発表とダニエルーの発表、ならびに、それらに続く討論は、シュリヤによる紹介文を付して、以下の書籍にまとめられている。Georges Bataille, *Discussion sur le péché*, présentation de Michel Surrya, Fécamp, Nouvelles Éditions Lignes, 2010.

10) Georges Bataille, « Sommet et déclin », *Sur Nietzsche*, *op. cit.*, p. 39–63.

11) « Discussion sur le péché », Georges Bataille, *Discussion sur le péché*, *op. cit.*, p. 126–127.

12) *Ibid.*, p. 134–144.

ユのいわば真意を理解しようと努め、さらに、バタイユの言い回しの不備によって彼の意図が誤解されてしまうことを警告し、たしなめ、叱咤善導を試みるような姿勢を取っていることには、意外の念すら浮かぶ<sup>13)</sup>。他方、バタイユのほうでは、「あなたは過度に論理的な方向に話を持っていきすぎる欠点がある」などと<sup>14)</sup>、反駁とはほど遠い言葉が口を衝きながらも<sup>15)</sup>、主張は譲らず、しかし、己の論理の不備、もしくは相手の論理の正しさを躊躇なく認める潔さが際立っている<sup>16)</sup>。清真人が「罪に関する討論」に関して述べたように、「バタイユにとってサルトルは卓越した理解者として現れる」のである<sup>17)</sup>。

- 13) たとえば以下の発言を参照。「私はなぜバタイユが「罪」という語を使うのかを知りたい。罪の観念なしでも、同じ考えを主張することができるのではないか。罪の観念は、彼が反面では拒絶する諸々の価値を参照するものであるように、私には思われる」(*ibid.*, p. 134)。「あなたは、「私が口にすると」などと言って、咎をまんまと言葉に被せてしまう。だが、一方にはあなたの口頭発表があり、もう一方にはあなたの具体的な研究がある。私の興味を引くのは、この研究のほうだけだ。[...] 重要なのは、言葉を口にしないで、あるいは、できるかぎり口にするのは少なくして、あなたが罪を実現する、その時であり、その瞬間だ。この瞬間は実在するし、この瞬間こそが重要なだ。そうした瞬間は、今日は生じていないが、私たちはそれについて話しているのだ」(*ibid.*, p. 139-140)。
- 14) *Ibid.*, p. 138. 「欠点がある」と言うために、péché と繋がる pécher par という表現を用いているのは、戯れによるせめてもの対抗と取れよう。
- 15) とはいえ、シュリヤのように、「サルトルの正確な論理に、バタイユは、情動的で損なわれた揺れ動く論理を巧妙に対置する [...]。この論理はあらゆる相手から、自らを堅固にするために使えると思っていた支えを巻き上げてしまう」として、反駁者バタイユの「論理」を評価・擁護する見解もないわけではない。Cf. Michel Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre, op. cit.*, p. 410.
- 16) 以下などを参照。「正直に言うと、私はこれらのことを、大まかな仕方では、行き当たりばつりにしか話せていない気がする」(« Discussion sur le péché », *op. cit.*, p. 129)。「はっきりしているのは、私がいささか性急で、しっかり厳密にものを考えるべきだったということだ」(*ibid.*, p. 136)。「あなたは正確に私の立場を言い当てた」(*ibid.*)。
- 17) 清真人「サルトルにおける暴力論の位置——サルトル—バタイユ問題にも寄

本稿は、論駁者サルトルを前にした、バタイユの振る舞いの率直さ、論理と正確性を尊重するこの作家の真摯さを強調したいわけではない。考えたいのは、バタイユが「新しい神秘家」という「侮辱」に「埋め合わせを得たいと願った」のだとして、実際の交流と対峙を通して「卓越した理解者」サルトルに接したあとに、この哲学者の指摘を自身の思想課題として引き受け、発展させていった可能性である。それは、バタイユの思想内容がサルトルに近づいた、ということ直接的には意味しない。両者の思想の近さと遠さについては、すでに重要な考察がいくつか提起されている。ジャン＝フランソワ・ルエットは、「新しい神秘家」におけるサルトルが、「バタイユを通して『嘔吐』(1938)を書いた自らに対する」自己批判の作業に専心していること<sup>18)</sup>、かつての克服すべき自身の姿(「兄弟」<sup>19)</sup>)をバタイユに見出していることを主張した。岩野卓司はルエットの主張を読み込みながら、「この兄弟のような近さのなかにはすでに遠さが生じている」とし<sup>20)</sup>、「存在や知に関し

---

せて]、『近畿大学生物理工学部紀要』第2号、1997年、97ページ。前後は以下の通り。「バタイユのいうかの「侵犯」の快楽、「至高性」の快楽、彼が「瞬間の君臨」と呼ぶところのニーチェ主義的な快楽、その構造の理解においてバタイユにとってサルトルは卓越した理解者として現れる。この点でまずわれわれの興味をかきたててやまないのは、「罪について」というタイトルで公表されたバタイユをめぐる討論会の全記録、そこに示されているサルトルおよびイポリットとバタイユとのあいだに取り交わされた論議であろう。サルトルはその討論会でバタイユのいう「至高性」の快楽とは〈存在〉への欲望であることを指摘する。たとえばサルトルはこう述べる。／「…(前略)…あなたが求めているのは存在であって、虚無ではない、ということ、悦惚というのは存在の内に於ける消耗なのであって、虚無における消耗なのではない、ということである。」(『バタイユの世界』p. 547)／討論会のなかでイポリットは、またガブリエル・マルセルも、このサルトルの指摘を支持する。バタイユも事実上それに同意したかに見える」(同論文、同ページ)。

18) Jean-François Louette, « Existence, dépense : Bataille, Sartre », *Les Temps modernes*, n° 602, déc. 1998 – Jan.-Fév. 1999, p. 23. 強調は原文。

19) *Ibid.*, p. 19, 20.

20) 岩野卓司「不可能な交わりがもたらしてくれる可能性について」、澤田直編『サルトル読本』所収、法政大学出版局、2015年、271ページ。

て、サルトルが暗黙の前提にしている存在の優位や存在と無の二元論を「バタイユが」大幅に逸脱して」おり、「嘗ての自分も今の自分も前提にしている存在の枠組みを壊しかねない危険に対する自己防衛」の必要ゆえに、サルトルからの論難が生じたという見立てを提起した<sup>21)</sup>。

この近さ、また「近さのなかの遠さ」<sup>22)</sup>を踏まえ、「罪に関する討論」での両者の対峙の誠実さにも目を遣るなら、かえって、『文学とは何か』(1947)でのサルトルのシュルレアリスム批判に抗議し、『レ・タン・モデルヌ』誌へのニーチェ論の投稿を撤回したうえで、編集長モーリス・メルロ＝ポンティ宛ての公開書簡を発表するまでしたバタイユの憤慨こそ<sup>23)</sup>、我々に問うべき事柄を示唆している。澤田直が指摘するように<sup>24)</sup>、「観念主義のくそったれども」たるシュルレアリストの首領として、ほぼ一貫して敵対してきたアンドレ・ブルトンとシュルレアリスムに、サルトルが批判を向けるに及んで——それはまさに、シュルレアリスムの現実乖離を糾弾するものだった<sup>25)</sup>——激昂し、バタイユが敢然と擁護に立つというのは、容易には理解し

21) 同論文、272-273 ページ。

22) 同論文、271 ページ。ここまでに挙げた研究のほかに、「サルトルとバタイユの思想が根本的に対立するものだ」というステレオタイプを乗り越えるべく、サルトルの「瞬間の思想」に焦点を絞りながら、「瞬間」「企て」「自由」「悪」といった主題をめぐり、バタイユと真逆の立ち位置にいるわけではない、バタイユとの思想交流の可能性に開かれたこの哲学者の思索を論じたものとして、以下の論文を挙げておく。永野潤「自由と瞬間——バタイユの「分身」サルトル?」、『別冊水声通信 バタイユとその友たち』所収、水声社、2014年、217-236 ページ。

23) Georges Bataille, « Lettre à M. Merleau-Ponty », O. C., t. XI, 1988, p. 251-252.

24) 澤田直「神秘主義をめぐる——バタイユとサルトル」、前掲論文、93-94 ページ。

25) ジャクリーヌ・シェニウー＝ジャンドロンは、『文学とは何か』におけるシュルレアリスム批判の核心を次のようにまとめている。「ジャン＝ポール・サルトルは1947年、この広範な企てに脱現実化という烙印を押した。彼はシュルレアリスムを(永遠なる)懐疑主義の主張と同一視し、幾つかの表現形態にアクセントを置きつつ、それを観念論的なものと判断したのである」

がたい事態なのである。着目すべきは、澤田が見抜くとおり、バタイユがサルトルに対して問題視するのが、「なによりもポエジーと悪」の論点をめぐってであるということであり<sup>26)</sup>、両者の「対決」が「倫理（文学と行動）、コミュニケーション」に関わるもので、それは実質、前年に「すでにボードレールをめぐって始まっていた」ということである<sup>27)</sup>。1946年にサルトルは、ボードレールの『内面の日記』（*Écrits intimes : Fusées – Mon cœur mis à nu – Carnet – Correspondance*）の序文として論考を発表する<sup>28)</sup>。47年に単行本としてレリスの序言を付して刊行されると、バタイユは「『赤裸の』ボードレール——サルトルの分析と詩の本質」と題した書評を『クリティック』第8・9号（1947年1・2月）に発表する。これを加筆修正したものが、後に『文学と悪』（1957）に収められるボードレール論である。

本稿では、バタイユをサルトルとの対決に踏み込ませた要因が、詩と文学

---

（ジャクリヌ・シュニウー＝ジャンドロロン『シュルレアリスム』星塾守之・鈴木雅雄訳、人文書院、1997年、25ページ。日本語訳の刊行に際して原著者による加筆修正がなされていることに鑑みて、日本語訳から引用を行う）。この指摘については、澤田直が「神秘主義をめぐって——バタイユとサルトル」の前章にあたる以下で引用し、注意を促している。澤田直「シュルレアリスムとエグゼティスム——ブルトンとサルトル」、『サルトルのプリズム——二十世紀フランス文学・思想論』第4章、前掲書、78ページ。

26) 澤田直「神秘主義をめぐって——バタイユとサルトル」、前掲論文、103ページ。

27) 同論文、105ページ。また、以下の論文も、バタイユのサルトルへの反応の原点が「詩の擁護」にあるとし、その根拠として、サルトルの『ボードレール』（1946、47）を承けたバタイユのボードレール論「『赤裸の』ボードレール——サルトルの分析と詩の本質」（1947）（後述）に見出されるこの同じ言葉への参照を促している。丸山真幸「非常事態にあるシュルレアリスム（あるいはバタイユによる詩の擁護）」、『津田塾大学紀要』、第49号、2017年、182ページ。

28) この論考にさらに先立つものとして、1945年に「Un Collège spirituel」、また46年に「Fragment d'un portrait de Baudelaire」が発表されている。このあたりの経緯は以下に詳しい。重見晋也「サルトル『ボードレール』のパラテキスト——Point du Jour 版 prépublication を対象とした調査の中間報告」、『広島大学フランス文学研究』、第30号、2011年、36–53ページ。



をめぐる見解の相違にあるという見通しのもと、その相違が明確化する決定的な契機として両者のボードレール論を読み解くところに到達したい。あらかじめ述べれば、サルトルがバタイユに己の「兄弟」を見出し、近親を介した「自己批判」の衝動に身を委ねたのだとして、バタイユのサルトル批判にもまた、かつての自らを乗り越える仕方文学を擁護しようとする企図が見て取れる。ただしその企図は、比喻を続けることが許されるなら、「兄弟」というよりむしろ、裁き手たる「父」をこの年少の哲学者に見出しながら、担われるように思われるのである。その様相を浮かび上がらせることが、本稿の終着点である。

以上のねらいに近づくため、本稿はまず、第二次世界大戦以前のバタイユの詩と文学をめぐる理解、とりわけ、ボードレール理解を検討していきたい。この時期のバタイユは、文学に対して積極的評価を行う機会は多くなく、ことボードレールに関しては言及すらめったになされない。とはいえ、その細い糸を辿ることで、若きバタイユの非文学的、ないし、反文学的な姿勢がやがて、ボードレールを内に宿すことで、文学への志向に転じていくさまが映じてくるのである。

## 2. サルトル以前：ボードレールを宿して

バタイユは、国立図書館賞牌部職員として古銭学の研究論文を上梓していた時期を除くと、執筆者としてのキャリアをシュルレアリスム批判によって開始している。先に引用した「観念主義のくそつたれども」という文言は、1929年2月に届けられたシュルレアリスムシンポジウムへの招待状を送り返すにあたって、バタイユが記載した言葉である。同年4月に学術誌『ドキュマン』(*Documents*) (1929–1931)の運営責任者に着任すると、彼は、「学説・考古学・美術・民族誌学」をテーマに掲げたこの雑誌本来の企図を反故にして、シュルレアリスム批判を展開するための舞台として利用しだす<sup>29)</sup>。とはいえ、バタイユは、ブルトンやシュルレアリスム、その作品や美

29) 委細については以下の拙稿等を参照いただきたい。石川学『ジョルジュ・バタイユ——行動の論理と文学』、第1章第1節「『逆転』への序章——『ドキュ

学を直接の題材として論難したわけではなく、批判はもっぱら、現実から乖離した観念主義全般、さらには、そうした観念主義と一体だと見なされる、詩や文学の理想主義的な審美主義に向けられる。たとえば、『ドキュマン』第7号（1929年12月）所収のダリ論「痛ましき遊戯」は、ブルトンが同年の第1回ダリ展覧会カタログの序文で、名指しはせずに『ドキュマン』執筆陣に向けて行った罵倒への意趣返しという面を持つが<sup>30)</sup>、そこでは、ブルトンの「キンメリア」「宝の土地」といった言葉が、詩の現実離れした性格を論うために、出典を示さずに引用され、「詩のたいへんな不能ぶり」「隷属した高貴さ、間抜けな観念主義」が嘲られている<sup>31)</sup>。これらの応酬を経て、ブルトンは29年12月の『シュルレアリスム革命』第12号に掲載された「シュルレアリスム第二宣言」で、ついにバタイユの名を挙げて批判し、「世界において最も下劣なもの、最も意気阻喪させるもの、最も腐敗したものをしか重視したくないと公言する」<sup>32)</sup>、「蠅が好き」<sup>33)</sup>な人間とこきおろす。バ

マン』誌時代の反観念主義」、東京大学出版会、2018年、12–26ページ。バタイユが研究者として論文を寄稿していた美術・考古学誌『アレチューズ』（*Aréthuse*）の主宰者の一人で、『ドキュマン』の発起人であるピエール・デスペゼルは、29年4月15日付のバタイユ宛の手紙で、「あなたがこの雑誌に選んだタイトルは、あなたの精神状態に対するドキュマン [資料] を与えてくれるという意味でしか正当ではありません」と、その暴走ぶりをたしなめている。Cf. Pierre d'Espézel, « Lettre à Georges Bataille (le 15 avril 1929) », cité par Michel Surya, *Georges Bataille, la mort à l'œuvre, op. cit.*, p. 150.

30) 以下の指摘を参照。Elza Adamowicz, « Matière ou métamorphose : Dali et Picasso », *Ceci n'est pas un tableau. Les Écrits surréalistes sur l'art*, L'Âge d'Homme, 2004, p. 143–159 / ジョルジュ・バタイユ『ドキュマン』江澤健一郎訳、「訳注」、河出文庫、2014年、140–141ページ。

31) Georges Bataille, « Le “Jeu lugubre” », O. C., t. I, 1970, p. 211–216.

32) André Breton, *Second manifeste du surréalisme, Œuvres complètes*, t. I, « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 1988, p. 824.

33) *Ibid.*, p. 825。「蠅が好き」というのは、バタイユが『ドキュマン』第4号（1929年9月）所収の論考「人間の姿」で、ヘーゲル的な体系に回収されない世界の「非蓋然性」の例として、「演説者の鼻に蠅が止まること」という事例を挙げていることへの揶揄である（Georges Bataille, « Figure humaine », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 184）。

タイユはレリスやレイモン・クノー、ロベール・デスノスらと『死骸』(*Un Cadavre*)と題した中傷パンフレットを発行し、「去勢されたライオン」というタイトルの文書で、「牛のブルトン、年寄りの耽美家、キリストの頭をした偽の革命家」<sup>34)</sup>、「馬鹿げた「宝の土地」で退屈にくたばりかけた偽善者」とやり返す<sup>35)</sup>。誹謗の価値はともかく、これらと近い時期に執筆されたと推測される、発表されなかったシュルレアリスム批判の文章が二篇あり、そちらには当時のバタイユの文学と詩に対する理解の根幹を示す内容が含まれている。そのうちの一篇を以下で検討したい。

取り上げるのは、「老いたもぐら」と超人ならびに超現実主義者〔シュルレアリスト〕という語の超という接頭辞(1931?)という論考である。そこでバタイユは、社会において低い価値しか持たず、人間の本質とは無関係なものとして捨象されてきた、「物質的な次元での現実、人間で言えば、生理的な次元での現実」<sup>36)</sup>こそが、実際には現実の基底をなすとする、「低い唯物論 (le bas matérialisme)」<sup>37)</sup>を展開する。そのなかで、シュルレアリスムは、低次な物質的現実の価値に本格的に着眼しながらも、それを新たな上位価値に位置づけ、イデア化=理想/観念化する、「イカロスのごときご立派な態度」<sup>38)</sup>を取るものとして、次のように批判される。

[...] シュルレアリスムは、低次の価値(無意識、性欲、卑猥な言葉遣い)をもたらしたことで、直ちに際立つのだが、問題とされたのは、こ

34) Georges Bataille, « Le Lion châtré », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 218.

35) *Ibid.*, p. 219.

36) Georges Bataille, « La “Vieille taupe” et le préfixe *sur* dans les mots *surhomme* et *surréaliste* », O. C., t. II, 1970, p. 98.

37) *Ibid.*, p. 93. 「低い唯物論」に基づくこうした主張は、『ドキュマン』2年次(1930)第1号に掲載された論文「低い唯物論とグノーシス主義」において公に展開されている。Cf. Georges Bataille, « Le Bas Matérialisme et le gnose », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 220–226.

38) Georges Bataille, « La “Vieille taupe” et le préfixe *sur* dans les mots *surhomme* et *surréaliste* », art. cit., p. 103.

これらの価値に卓越した性格を与え、最も非物質的な価値に結びつけることなのだ。

そこから帰結する変質は、シュルレアリストたちにとってはどうでもよいのだ。無意識はもはや哀れな詩の宝でしかなく、サドはその護教論者たちによって意気地なくも去勢され、道学的な観念論者＝理想主義者 (*idéaliste*) の容貌を取ってしまう……。低い部分の要求はみな、屈辱的にも、高い部分の欲求に偽装させられるのだ<sup>39)</sup>。

ここで、シュルレアリストたちが理想＝観念へ変質させたという「低次の価値」と関連づけて、マルキ・ド・サドの名前が挙げられていることは目を引く。文学者としてのサド、また、サド文学に対する評価に先鞭を着けたのはシュルレアリストたちであり、バタイユも後年、『文学と悪』に収められるサド論において、ブルトンとエリュアールに言及して、この面での業績を認めている<sup>40)</sup>。とはいえ、30年代のバタイユにとって、シュルレアリストたちは、暴力的で異端的な性愛をものにしたサドを卓越した作家として奉る「護教論者」でしかなく、そうした仕方でもサド、ならびにサドの描く「低次」な性愛を、尊ぶべき観念＝理想たる「詩の宝」へと美化する欺瞞を働いていることになる。こうしたサドの「去勢」は、「老いたもぐら」論考では<sup>41)</sup>、文学や詩自体の不可能性へと次のように敷衍される。

39) *Ibid.*

40) Georges Bataille, *La Littérature et le mal* (1957), O. C., t. IX, 1979, p. 240, en note. なお、この2名に加え、スウィンバーン、ボードレー、アポリネールの名前が挙がっていることは付記しておきたい。

41) 「老いたもぐら」というイメージは、天空の高みを目指す「イカロスの」な「鷲」のイメージとの対比において、「プロレタリアの唯物論的な内臓としての、地面の内臓」を自在に行き来する存在の形象である (Georges Bataille, « La “Vieille taupe” et le préfixe *sur* dans les mots *surhomme* et *surréaliste* », art. cit., p. 97)。明らかかなように、ここでは、「低次の価値」を現実の基底として、ただし、観念＝理想という高次の価値に転換することなしに掘り下げる姿勢が、下位階層たる労働者による政治革命の実現可能性と結びつけられて考察されている。そもそも、この「老いたもぐら」という表現は、マルクス

ブルトン氏の乱雑な頭には、何ものも詩の形態においてしか入っていくことがなく、これは遺憾と言うべきである。ブルトン氏の実存は、すべてが純粋に文学的であり、卑俗で陰鬱な、あるいは平板な出来事が彼の

---

が『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』（1852）で、ルイ・ボナパルトのクーデタという仕方で茶番的に反復された「革命」を称するのに、次のように用いているものである：「しかし、革命は徹底的である。それはまだ煉獄を通過する旅の途上にある。革命は、手順を踏んだ方法で自分の仕事を遂行する。1851 年 12 月 2 日までに革命はその準備の半分を完了したので、いまや後の半分のやり遂げる。[...] 革命がその準備作業のこの後半分を成し遂げたとき、全ヨーロッパが椅子から躍り上がって、こう歓声をあげるであろう。よくぞ掘り返した、老いたモグラよ！」（カール・マルクス『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』植村邦彦訳、平凡社ライブラリー、2008 年、174 ページ）。バタイユは、「老いたもぐら」論考を執筆したあたりの時期と推測される 31 年 1 月 10 日に、国立図書館でマルクスの同書の仏訳を借用している記録があり（Georges Bataille, « Emprunts de Georges Bataille à la Bibliothèque Nationale », O. C., t. XII, 1988, p. 575）、この引用であるだろう（その前提で議論を展開したものとして、次の論考を挙げておく。Marco Tabacchini, « Taupes ou de la décomposition permanente », *Cahiers Bataille*, n° 5, Meurcourt, Éditions les Cahiers, 2022, p. 258–270）。追加で指摘しておくべきこととして、①このマルクスの文章は、ルイ・ナポレオンのクーデタの翌日にエンゲルスがマルクスに宛てた手紙の文面を引用しつつ書かれたもので、エンゲルスの手紙には、「実際まるで墓の中の老ヘーゲルが世界精神として歴史を導いて、きわめて几帳面にすべてを二度くり広げさせたかのような。一度目は偉大な悲劇として、二度目はみすばらしい笑劇として」という文言があり（前掲訳書における植村邦彦の訳注（201–202 ページ）と、それを承けた以下の論文の指摘を参照。門脇健「精神と亡霊」、『大谷大學研究年報』第 59 号、2008 年、133–134 ページ）、「老いたもぐら」は、この「老ヘーゲル」とも重ね合わせられるイメージであること、②「もぐら」の喩えの発想源が、1837 年にエドゥアルト・ガンスが編集したヘーゲル『歴史哲学講義』の序論にある、次の文章であると思われること：「[...] 次に来る民族との接触によってはじめて過ぎ去った民族の精神に光が当たるのである。この精神は、公然とは現れないことが多い。フランス人が言うように、地下で（sous terre）ここかしこ動き回るのである。ハムレットは、あちらこちらから彼に呼びかける父親の亡霊に呼びかける。「お前は俺にとって勇敢なモグラだ。」というのは、亡霊はしばしばモグラのように地下を掘り進み彼の仕事を完成するから

周りに引き起こす事柄から、顔を背けさせるのだ […]」<sup>42)</sup>。

このように、ブルトンに代表させた仕方、詩と文学は、「卑俗で陰鬱」かつ「平板な出来事」を直視せず、そこから上方に飛翔し、理想＝観念の高みへと逃亡する現実乖離した姿勢を指弾される。「革命が、何よりもまず、

である」(前掲論文における門脇の訳による(123-124ページ)。この発想源への着眼自体が、同論文の第一節(123-127ページ)ほかで門脇が行っているものである)、の二点を挙げておく。①に関していうと、「老ヘーゲル」という言い回しは(それ自体、ヘーゲル死後の学派の名称と結びついたイメージだが)、バタイユがのちに1947-1948年の論考「実存主義から経済学の優位へ」で次のように用いる表現への反響が想定できる。『『精神現象学』を読むか、老ヘーゲル(Hegel vieux)の肖像を眺めるかすれば、すべての可能性がひとつになる、完了ということの凍てつくような印象にとらわれずにはいない。[…]老ヘーゲルの顔立ちに現れる荒廃した和らぎは、見るものを打ちのめし、かつ落ち着かせるのだが、それは始まりをなす不可能性の忘却ではまったくなく、むしろその似姿である。すなわち、死と完了の似姿である」(Georges Bataille, « De l'existentialisme au primat de l'économie », O. C., t. XI, *op. cit.*, p. 286-287. 強調は原文)。②に関していうと、ここでヘーゲルが参照しているのはシェイクスピア『ハムレット』の第1幕第5場だが、この場の最後でハムレットが発する“The time is out of joint”(「この世の関節が外れてしまったのだ」、福田恆存訳、新潮文庫、1988年、47ページ)という科白は、バタイユが好んで引くものであり(たとえば以下:「カストロフィ」は最も深い革命だ。それは、「蝶番から外れた」(« sorti des gonds »)時間＝時代だ」(Georges Bataille, *L'Expérience intérieure*, O. C., t. V, 1973, p. 89. この仏語表現が『ハムレット』に拠ることは以下に指摘がある。Jean-François Louette, « Informitas de l'univers et figures humaines. Bataille entre Queneau et Leiris », *Littérature*, n° 152, décembre 2008, p. 127)、あるいは、「もし歴史が終われば、時代の外への跳躍があるのではないか。私は永久に叫ぶ。「蝶番から外れた時代」と(*Time out of joints*)。 (Georges Bataille, *Sur Nietzsche*, *op. cit.*, p. 97. 邦訳者の酒井健もこれに『ハムレット』への参照を看取している。『ニーチェについて』、前掲書、「訳注」、370ページ)、バタイユの思索におけるマルクス＝ヘーゲル＝『ハムレット』の連関を考察するための素材として、さらなる注目に値する。

42) Georges Bataille, « La “Vieille taupe” et le préfixe *sur* dans les mots *surhomme* et *surréaliste* », art. cit., p. 105. 強調は原文。

階級闘争の決定的局面だと見なされないような、そうした革命家たちに対しては、ある種の軽蔑的な反応が避けがたい」としつつ、「この消耗させる逃げ口上」を当てこする論考の筆致からすれば<sup>43)</sup>、詰られているのは、「マルクス主義的共産主義のいくつかの原則すら認めたシュルレアリスム」の<sup>44)</sup>、革命の実践にかかる舌先三寸な虚弱さに現れ出る、詩と文学の行動面での無力である。とはいえ、上の引用部からは、シュルレアリスム断罪における一定の留保、価値判断の留保もまた、読み取れなくはない。「ブルトン氏の実存は、すべてが純粋に文学的であり」と強調されていることから、詩と文学、芸術の運動を基にしたシュルレアリスムが、「純粋に」文学的であることから脱し、行動への関与を深めるならば、「低次の価値をもたらした」その卓越性は現実に根ざしたものになる、という含みがあるようにも受け取れるためである。重要なのは、シュルレアリスムが持ちうるこうした肯定的な可能性が、文学であることの放棄に結ばれるのではなく、むしろ、文学それ自体が持ちうる可能性として提起されていることである。以下を参照しよう。

文学的古物にはこれっぽっちの敬意も持たないが、ボードレールやランボー、ユイスマンス、そしてロートレアモンのいくつかの作品が持つ「不健康な」(« insalubre ») 性格は、今日なお、この分野で拘る余地のあるいっさいであり続けている。どの観点から見ても、シュルレアリスムは、不健康さへの強迫観念に対して価値を与えるのをやめていない。[...] とはいえ、残念なのは、それらの不健康な形態が、詩の形態に限定されていることだ [...] <sup>45)</sup>。

言及された作家たちは、ユイスマンスを除けば、散文よりも詩を本業とした者たち、まさに詩人と呼ぶべき作家たちである。その系列に位置づけられるシュルレアリスムの「不健康さ」が「詩の形態に限定されている」のを遺

43) *Ibid.*, p. 95.

44) *Ibid.*, p. 94.

45) *Ibid.*, p. 105.

憾とされるのは、一見すると筋がつかみがたい。ここでは「不健康」という言葉を、字義通りに健康を害する性質という意味で、それも、作品の書き手である作者個人の生の存続を脅かす性質という意味で理解するべきだろう。これらの作家が梅毒やガン、薬物使用等々の心身の不健康さによって特徴づけられることは確かであり<sup>46)</sup>、バタイユはそうした点に、「不健康」な詩作品——「低次の価値」を浮かび上がらせる詩作品——の、「詩の形態に限定」されない、実存を巻き込み現実作用する特質を見出し、評価しているのである<sup>47)</sup>。バタイユは、作品から実存へ、作品から現実への「不健康さ」の拡大を、低次の階級たるプロレタリアートによるブルジョワジー支配の転覆と関連づけて論じようとするのだ。その妥当性は衆目が一致するようなものではあり得ないが、ともあれ、こうした文学と詩に対する両義的な評価が30年代初頭のバタイユによって行われ、その文脈でボードレールが肯定的に取り上げられていることをまずは銘記しよう。

結局この論考は、文学が持ちうる実存面での可能性に触れながらも、現代ではその可能性が発揮されえないことを指摘して、文学と文学者たちの観念主義＝理想主義的特質を痛罵するところに行き着く。「今の時代に、名文士たち、また、呪われた詩の愛好者たちの憤怒に人間的に由来する低次さなどというものはない。土方の心を揺り動かすことができないものは、すでに幻影同然である。[…][人間の直接的利益]を蔑む連中を打ち倒せ [à bas]、

46) ボードレールは梅毒により46歳で死去。ランボーはガンにより37歳で死去。ユイスマンスはガンにより59歳で死去。ロートレアモンはおそらく肺病により24歳で死去。

47) 作品の特質が作者の実存を巻き込むというこうした観点は、バタイユに長らく保たれていたことが窺われる。たとえば後年の論考「実存主義から経済学の優位へ」(1947-1948)では、ランボー、ゴッホ、キルケゴールに対して、「感情の強烈さが作品を魅力的なものにするのだが、それはまた、作者の壊滅を約束することによって、普遍を基礎づけているのである」、「あまりの緊迫ゆえに、生きながらえることのできない精神」といった評価がなされている。Georges Bataille, « De l'existentialisme au primat de l'économie », art. cit., p. 287-288. ゴッホは37歳で自死。キルケゴールは急病により42歳で死去。



気高い精神で、物質的欲求をお高くも嫌悪する口先連中を打ち倒せ！」<sup>48)</sup>。かくして論旨は、『ドキュマン』と「去勢されたライオン」に逆戻りしてしまふのである。

とはいえ、文学を用済みとみなす判断が、バタイユにおいて、決して固定的なものではないことは見ておこう。1931年1月の『ドキュマン』廃刊以後、バタイユは、『社会批評』誌（1931-34）、そして自ら創刊した『アセファル』誌（1936-39）に言論活動の舞台を移す。33年のナチス・ドイツ成立以降は、ブルジョワ支配の転覆とともに、ファシズム支配の転覆に問題関心が向けられるようになり、その見地から、ブルトンと和解を敢行して行動組織「コントロール=アタック」(1935-36)を立ち上げる<sup>49)</sup>。現実の政治行動へと傾斜していくように見えるバタイユだが、限られた機会とはいえ、「老いたもぐら」論考での詩の積極的評価に繋がる内容が開陳されることがある。代表的な事例が、論考「消費の観念」(『社会批評』第7号所収。1933年1月)の次の一節である。

詩という言葉は、喪失状態を表現する、最も墮落しておらず、最も知性化されていない形式に与えられるなら、消費の同義語と見なすことができる。それは実際、最も正確な仕方、喪失を手段とした創造を意味しているのである。したがってその意味は、供犠の意味と近いものだ。  
 [...] この要素 [詩の後々まで残る要素] を我がものとする稀な人間たちにとっては、詩的消費の帰結は象徴的なものに留まらなくなる。そのようにして、一定程度、象徴の機能がそれを引き受ける者の生そのもの

48) Georges Bataille, « La “Vieille taupe” et le préfixe *sur* dans les mots *surhomme* et *surréaliste* », art. cit., p. 109.

49) ブルトンらシュルレアリストたちとの協働は長続きせず、活動の方向性の違いというよりもむしろ、組織の主導権争いの結果、「コントロール=アタック」は結成から一年も経たずに瓦解し、シュルレアリストたちはバタイユに対して「超=ファシスト」との批判を差し向けた。この経緯については以下の拙稿などを参照。石川学『ジョルジュ・バタイユ——行動の論理と文学』、第1章第4節「[コントロール=アタック]と[超=ファシズム]」、前掲書、49-57ページ。

を巻き込んでしまうのである<sup>50)</sup>。

ここでは「消費」や「供犠」など、こと第二次大戦以後に著書でまとまった思索が展開される主題が先駆的に考察されており、その点でこの論考の重要性は際立っている。本稿の趣旨からすれば、「消費」と関連づけられた詩が、「それを引き受ける者の生そのものを巻き込む」という、作者に対して実存面で及ぼす効力によって、「象徴」を超えた現実への働きかけの力能を引き続き評価されている事実を踏まえておけばよい。

シュルレアリストたちとの内紛によって「コントロール＝アタック」が瓦解したあと、バタイユは「社会学研究会」(1937-1939)と「アセファル」(1937-1939)という二つの組織を主宰する。後年の回顧によれば、「アセファル」は「政治に背を向け、もはや宗教的目的をししか企てない「秘密結社」」であり、「社会学研究会」はその「いわば外的な活動」という位置づけであった<sup>51)</sup>。成員の人身供犠をすら発案したという、この宗教的「秘密結社」への注力は、一見すると、革命の実現とファシズムの転覆という広範なスケールでの政治的目標をバタイユが放棄し、宗教儀礼を通じた世界の様相の変容に重点を移行させた可能性を想像させる。だが、「社会学研究会」の「マニフェストの価値を持つ試論」の一つと言える<sup>52)</sup>、「魔法使いの弟子」と題された文章(1938年7月『NRF』誌掲載)を読むと、浮かび上がるのは別の事態である。この試論でバタイユは、現代を生きる人間の実存が、「有用な財物の生産に縛られた」労働の主体としてのありように制限され、さらに、「芸術、政治、科学」という三つの営為の「言いつけどおりに」生きることを余儀なくされていると主張する<sup>53)</sup>。「芸術、政治、科学」は社会において指導的な役割を果たすのだが、結果、人間の実存が、「科学の人間」、「虚

50) Georges Bataille « La Notion de dépense », O. C., t. I, *op. cit.*, p. 307. 強調は原文。

51) Georges Bataille, « Notice autobiographique », O. C., t. VII, 1976, p. 461.

52) Denis Hollier (éd.), *Le Collège de sociologie*, Paris, Gallimard, « Folio », 1995, p. 294. 同書でのオリエの評価による。

53) Georges Bataille, « L'Apprenti sorcier », *ibid.*, p. 306.

構の人間]、「行動の人間」という「分離した実存」に分断され、人間が本来そうであるところの「実存の全体性」が損なわれているというのである<sup>54)</sup>。こうした現状認識のもとで、バタイユは、「実存の全体性」を取り戻す活動として「恋愛」を提起する。「ばらばらになったこの世界のなかで、〈愛しい存在〉は、生の熱気へとひとを連れ戻す効力をなくさずにいた唯一の力となった。[……] 一個の存在が己の奥底に持つ、失われたもの、悲劇的なもの、あの「目の眩むような驚異」には、もうベッドの上でしか出会えないのだ」<sup>55)</sup>。続けてバタイユは次のように書いている。

幸せな活動は「夢の同胞」(« *sœur du rêve* ») であり、ベッドのまさにそのうえで、生の秘密が認識に対して開示される。そして認識とは、科学が——芸術や実践的行動と同様に——実存に断片的な意味を与えるおそれがもうなくなった、この保護された空間のなかで、人間の運命を脱自とともに発見することなのである<sup>56)</sup>。

引用符に括られた「夢の同胞」という言葉は、ボードレール『悪の華』(初版1857) 所収の詩「聖ペトロの否認」を参照したものでろう<sup>57)</sup>。全体的実存を回復する営為として恋愛を描述すべく、芸術——実存を分断する営為の一つである——の所産を持ち出すのは不用意なようだが、ことはそう単純ではない。というのも、「聖ペトロの否認」の最終連は、以下のようなものだからだ。

まこと、この私はといえば、心安んじて出て行くだらう、

54) *Ibid.*, p. 302, 307, 313.

55) *Ibid.*, p. 314–315.

56) *Ibid.*, p. 317.

57) 「魔法使いの弟子」の邦訳者である酒井健も、この言葉がボードレールの同詩にあることを指摘している。『魔法使いの弟子』酒井健訳、景文館書店、2015年、42ページ。

行動が夢の同胞でないような世界からは。  
願わくは、剣を用い、剣によって亡びたいものだ！  
聖ペトロはイエズスを否んだ……あっぱれだ！<sup>58)</sup>

この詩を含む、「反逆 (révolte)」の章を構成する詩三篇は、初版時に「宗教道徳紊乱」の容疑で告発された。鈴木啓二によれば、「聖ペトロの否認」は宗教的反逆の主題に加え、政治的反逆の主題を持つというのが通説であり、その主要な根拠とされるのが、ボードレールが初版時に「反逆」の章に付した弁明文の、とりわけ以下の一節である。「[...] イエズス = キリストに対して、征服者の役割、平等をもたらし破壊するアッティラの役割をお演じにならなかったことを、遺憾としているなどと、[道義派の批評家たちは] 著者を非難することだろう」<sup>59)</sup>。鈴木の説解に従えば、ボードレールは、1852年が初出のこの詩で、48年の二月革命を念頭に置きながら、「過激で暴力的な革命家の役割」をイエスが担わなかったことを遺憾とし、彼を捕らえにきた兵士たちに抗おうとするペトロに「剣をさやにおさめよ」(『マタイによる福音書』第26章第52節)と命じた姿勢を不服として、「自ら「剣をとる」こと」を語り手に選ばせる<sup>60)</sup>。「ボードレールの「聖ペトロの否認」は、イエスが命じる辛抱強さロンガニミテを拒絶して「剣」をとる、民衆の闘争の論理」、「蜂起への参加へと至る論理」を示すものと理解されるのである<sup>61)</sup>。

58) 『ボードレール全集 I』阿部良雄訳、筑摩書房、1983年、237ページ。以下、ボードレールの文章は阿部良雄訳を掲げる。原文は以下。「— Certes, je sortirai, quant à moi, satisfait / D'un monde où l'action n'est pas la sœur du rêve ; / Puissé-je user du glaive et périr par le glaive ! / Saint Pierre a renié Jésus… il a bien fait ! » (Charles Baudelaire, « Le Reniement de Saint Pierre », *Les Fleurs du mal*, Paris, Gallimard, « Folio », 1972, p. 158.

59) 鈴木啓二「『聖ペトロの否認』再読」、『ODYSSEUS 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻紀要』第22号、2018年、7-8ページ。ボードレールの引用は阿部良雄の前掲訳書より行われている。

60) 同論文、10ページ。

61) 同論文、14ページ。「聖ペトロの否認」に政治的反逆の主題を読み取ったのは、ボードレール研究としては、1959年に刊行されたアントワヌ・アダンによ

あらためて、「実存の全体性」を回復する営為として恋愛を論じるバタイユが、「夢の同胞」というボードレールの詩句にそれを重ね合わせている意味を考えよう。恋愛という「幸せな活動」は、実存を断片化する「実践的行動」から超絶した聖域として「夢の同胞」であるわけではない。むしろ、「実践的行動」が目指す現実世界の変革をも含み込む営みとして、また、科学による世界の客観的な認識と、芸術＝虚構による十全な実存の表象とをも含み込む「全体的」な営みとして、現実と「夢」を通底させ、世界の捉え方を変容させ、世界を生きる主体のあり方を変容させる、そうした意味で「夢の同胞」として提起されたのではなからうか。だからこそ、この営みは、ファシズム国家という「軍隊の帝国」の支配に抵抗し、「悲劇の帝国」による支配を行き渡らせ、ファシズム国家を打倒するという、「秘密結社」アセファルに託された壮大な企てに通じていくものとして示されうるのである<sup>62)</sup>。

る『悪の華』批判版が嚆矢をなす。ただし、アダンは、イエスが「征服者の役割、平等をもたらし破壊するアッティラの役割」を演じたことをボードレールが遺憾としているように弁明文を解釈し、この詩を「1851年12月2日のルイ・ナポレオン・ボナパルトによるクーデタを契機にボードレールが「非政治化」した後の詩」を見なして、この見解がやがて通説化した。鈴木は、ボードレールの弁明文に対する既存の解釈の不正確さを指摘し、この詩に、革命への参加を民衆に呼びかけるいわば政治的ボードレールの姿を浮かび上がらせた点で独自である。

62) バタイユが自らの目論見をこうした企図と結びつけていたことは、1938年3月19日に彼が「社会学研究会」で行った口頭発表（ロジェ・カイヨワの発表原稿の代読とコメント）での次のような発言から明らかである。「軍隊の帝国には、別のもうひとつの帝国を対決させるしかないと思います。ところで、軍隊の帝国以外には、悲劇の帝国しかほかに帝国はありません […] 悲劇の精神は、人々を現実支配することができます。それは、人々に沈黙を強い、沈黙に追いやる力を有しています。実際には、悲劇こそが現実の帝国支配を振るうのです」(Georges Bataille, « Notes », Roger Caillois, « Confréries, ordres, sociétés secrètes, églises », Denis Hollier (éd.), *Le Collège de sociologie, op. cit.*, p. 223)。「もし荒々しく清新で、足先から頭まで無作法で、隷属的な構成を能くしない宗教組織が存在していれば、武装した祖国という金銭的必要性が見え見えのイメージのほかにも愛すべきものが、生きるに値するものが、死ぬに値するものがあるのだということを人間は学ぶ——そして忘

この時期のバタイユは、「呪われた詩人」にして政治的なボードレールを内に宿し、同時に、「実存の全体性」を表現する「社会的事実」を探求する社会学者として<sup>63)</sup>、芸術・行動・科学の三つに断片化した実存を自身の活動を通して統合し、「全体的」なものとして取り戻す試みに腐心していたと言えるように思われる。

第二次世界大戦の勃発以後、「社会学研究会」と結社「アセファル」の活動はいずれも頓挫する。孤独のなかでこれまでの活動の再考を余儀なくされたバタイユは<sup>64)</sup>、執筆にことさら注力し、まとまった規模の単著をはじめ

---

れずにいる——ことがまだできるはずです！ […] 悲劇の人間が属する帝国は、選別的共同体を手段にして実現されるのであり、さらに言えば、それによってしか実現されないのです」(ibid., p. 228–229)。無論、恋愛における二者の関係と、「悲劇の帝国」の手段たる「宗教組織」とはスケールが異なるが、「魔法使いの弟子」において両者の差異は、後者に「神話」の観念を当てはめることによって、次のように説明される。「神話は、芸術や科学や政治では満足できない者の手に今でも委ねられている。愛は、それだけでひとつの世界を作り上げるが、その世界を取り巻くものには手をつけない。 […] 神話だけが、ひとつひとつの試練によって打ちのめされてしまった者に、人々の結集する共同体へと拡充する充溢の残像を思い出させるのだ」(Georges Bataille, «L'Apprenti sorcier», art. cit., p. 322. 強調は原文)。詳細な分析は別稿に譲るが(石川学『ジョルジュ・バタイユ——行動の論理と文学』、第1章第7節「社会学研究会」の活動(2)、前掲書、76–90ページ)、恋愛において個人のあいだに垣間見られる現実と夢の通底を、「神話」を通して社会規模に拡大するのが「宗教組織」「秘密結社」の役割だということになる。

63) 「実のところ、純粹科学が分離の現象であるかぎり、社会学そのものが純粹科学の批判となるのは避けがたいことである。社会的事実だけが実存の全体性を表現する […] したがって社会学的な科学はおそらく、自然の分離された様相に関わる諸学とは異なった条件を必要としている」(Georges Bataille, «L'Apprenti sorcier», art. cit., p. 302, en note)。

64) この時期のバタイユの「孤独」については、「社会学研究会」と「アセファル」の参加者であった岡本太郎による以下の証言がある。「ドイツ軍がパリに殺到する数日前である。私はついにフランスにとどまることを断念して、バタイユに別れを告げに行った。仲間はすべて離散してしまい、当時パリ国立図書館に勤めていた彼と私だけがのこっていた。最後の一人である私が帰国することをつけると、彼はグッと両手を握りしめ、前につき出し、天井の一

世に問うことになる。その『内的経験』に端を発して、サルトルとの一連の応酬と交流が生じるのは、本稿冒頭で述べた通りである。シュルレアリスムへの態度をめぐり、両者の関係は別段階に入ることになるが、この分岐を本質的に兆していそうなのが、ボードレールをめぐる評価のずれである。次章ではこの問題を詳らかにしたい。

### 3. サルトル以後：白日下のボードレール

既述のとおり、『文学と悪』（1957）のボードレール論は、サルトルの『ボードレール』（初出1946、単行本1947）の書評として1947年に発表されたのが初出である。本稿では、『文学と悪』の他の論考との繋がりを視野に入れ、同書に所収された版を検討対象とする。

ボードレール論に目を遣る前に、『文学と悪』序文にある、文学についてのバタイユの定義を参照しておこう。そこで文学は、行動との関係において、次のように述べられる。

文学とは潔白なものではなく、さらには、有罪なものだと、結局は自分をそのようなものだと認めなければならなかった。権利を持っているのは行動だけだ。文学とは、[...] ついに再び見出された幼年期なのである（l'enfance enfin retrouvée）。だが、幼年時代が支配をするならば、それに真実があるだろうか？ 行動の必然性を前にして際立つのは、カフカの誠実さであり、彼は己にいかなる権利も認めなかった。[...] 結局は、文学は自らの有罪を認めなければならなかったのだ<sup>65)</sup>。

---

角をにらみつけた。「こんなことで、決して挫折させられはしない。いまに見給え。再びわれわれの意志は結集され、熱情のボイラーは爆発するだろう！」／孤独な彼の両眼は血の色をしていた」（岡本太郎「わが友——ジョルジュ・バタイユ」、『岡本太郎の本1 呪術誕生』、みすず書房、1998年、202-203ページ）。

65) Georges Bataille, *La Littérature et le mal*, *op. cit.*, p. 172. 強調は原文。

「ついに再び見出された幼年時代」という表現は、ことフランツ・カフカと結びつけられており、また、同じく『文学と悪』の一章が捧げられた作家である、マルセル・ブルーストの『見出された時』(*Le Temps retrouvé*)を思い起こさせもする<sup>66)</sup>。とはいえ、ここでバタイユが念頭に置いているのは、ボードレール「現代生活の画家」(1863)の以下の部分だろう<sup>67)</sup>。

子どもはすべてを新しさのうちに見る。子どもはいつも酔っている。色彩や形態をむさぼり吸い込む子どもの歓びほど、いわゆる靈感に似たものはない。[...] 天才とは、意のままに再び見出された幼年期 (*l'enfance retrouvée à volonté*)、今や己を表現するために成年の諸器官をもつようになり、無意志的に集積された材料の総体に秩序をつけることを可能にしてくれる分析的精神をもつようになった、幼年期に他ならない<sup>68)</sup>。

『文学と悪』序文と「現代生活の画家」のこの一節を比較対照した酒井健によれば、ボードレールが記しているのは、「才能豊かな芸術家のその才能とは、自分が欲するだけ幼年を甦らせて、天真爛漫な子どもの好奇心で世界を眺め、大人には陳腐に見える風景や現象にも新たなものを見出していく能

66) 『文学と悪』では紙幅が割かれていないが、同じ年に出版された『エロティシズム』(1957)の序論末尾で、次のように、ランボー「永遠」が引かれているのを思い出してみてもよいだろうか。「あれがまた見つかった (*Elle est retrouvée.*) / 何が? 永遠が。」(Georges Bataille, *L'Érotisme*, O. C., t. X, 1987, p. 30.)

67) これについては以下に指摘がある。酒井健「バタイユと「見出された幼年」——インファンティア概念への一視角」、『法政哲学』第13号、2017年、14-15ページ。また、次の論文でも、こうした定義の「ボードレールの出自」が指摘されているが、判断の根拠として「現代生活の画家」は直接挙げられていない。Carlo Pasi, « L'Intervention de Georges Bataille », *Lignes*, n° 1, Paris, Éditions Léo Scheer, 2000, p. 64.

68) 『ボードレール全集Ⅳ』阿部良雄訳、筑摩書房、1987年、145ページ。強調は原文。一部表記を変更した。



力のこと」、という主張である<sup>69)</sup>。酒井は、『『文学と悪』の「まえがき」のバタイユは、こうしたボードレールの言葉をそのまま継承しているわけではない」として、前者における後者の問題意識の深化をこう指摘する。

1863年の詩人が眼前に見ていた近代と1957年の思想家が対応した近代とは違う。理性偏重の近代の病はいつそう深まり、他方で子どもの非理性への考察も深まっている。「見出された幼年」という表現にボードレールは「好きなだけ」「欲する分だけ」という意味の言葉 (*à volonté*) を付加できていた。バタイユにはとうていできないことだ。この言葉を「やっとのことで」「ついに」という言葉 (*enfin*) に取り替えている。他方で絵画の表現論のほうへ「幼年」問題を差し向けていたボードレールに対して、バタイユは、文学論の次元に立ちつつも、存在論、つまりどのように存在しているのかという実存の在りようへ「幼年」を差し向けて、よりいつそう根本的な次元で考察を展開させている。そして「大人」の理性との接続もボードレールほどスムーズに処理できなくなっている。「幼年」を再び生きることはもはや罪深いとみなさざるをえなくなっている。近代の壁はそれだけ厚くなってしまったのだ<sup>70)</sup>。

この読みに沿うなら、バタイユは、世界を先入見なしに見つめ、都度歎びとともに新たな発見をしていく「靈感」としての「子ども」の能力を、「大人＝成年」の表現力と分析力を備えつつ駆使する者が芸術家であるとするボードレールの考えを引き継ぎながらも、現代においてそうした力を能くすることの難しさ、僥倖的性質に力点を置いていることになる。「子ども」の能力を、「大人＝成年」が持つべき理性の欠落、ないしそれからの逸脱と捉えるなら、そのような能力を「大人＝成年」が再び見出すことは義務もととり、「罪深い」ことですらある。バタイユ自身の言葉によれば、この有罪性

69) 酒井健「バタイユと「見出された幼年」——インファンティア概念への一視角」、前掲論文、15ページ。一部表記を変更した。

70) 同論文、16ページ。一部表記を変更した。

は、「行動の必然性」を前にした「文学」の有罪性、有用な活動をなすべしという行動規範に従えない文学の小児病的な咎として、社会から譴責される現状となっているのである。思い返せば、すでにボードレールの『悪の華』、その「反逆」が文字通り、裁判で有罪判決を受けていた事実をバタイユが意識しなかったとは考えがたい。文学が「反逆」という対抗行動を謳うことの有罪性、この「悪の華」が先にあり、そこから、行動面での文学の無力という別の位相での有罪性が、時代の推移とともに生じてくる流れなのだ。そして、バタイユが「存在論 […] へと「幼年」を差し向けて、よりいっそう根本的な次元で考察を展開させている」とすれば、こうした100年の推移を経て、ボードレールを「反逆」においてではなく、「反逆」の不在において有罪とみなし、「悪」とみなす観点が浸透してきたことへの問題関心が根底にあるように思われる。すなわち、サルトルの『ボードレール』に対する問題関心である。

『ボードレール』でサルトルは、個々の詩作品に立ち入って分析するのではなく、ボードレールそのひとの「実存主義的精神分析」を展開する<sup>71)</sup>。まず着目したいのが、「現代生活の画家」のくだんの一節に向けられた、以下

---

71) ボードレールの詩作品ではなく、その生と実存が分析の対象となるのは、この論考が『内面の日記』の序文として執筆された経緯を踏まえれば、ある程度必然的だが、レリスが指摘するような、「(彼自身告白しているように) 詩をまるで解さない」サルトルの傾向に依る部分もあるだろう (Michel Leiris, « Note », Jean-Paul Sartre, *Baudelaire*, Paris, Gallimard, 1947, p. XIII)。『ボードレール』邦訳者の佐藤朔によれば、「ボードレールはサルトルの精神分析の実験材料にされたようなもの」であり、「実存主義的精神分析では、一人の人間を研究する出発点として、幼年時代を重要視する。この点、他の精神分析学と同じであるが、実存主義の哲学によると、幼少年時代は、自由=物の時期であって、人間は事物のようにこの世の中にあり、すべての真理とモラルを外部から受けとる年頃である。[...] サルトルは、ボードレールにとって自由=物の安心感や安定感にふたたび戻りたいという願望が、かれの生涯の一切の行動の選択を決定したと見なしている」のだという。佐藤朔「あとがき」、ジャン=ポール・サルトル『ボードレール (サルトル全集第16巻)』佐藤朔訳、人文書院、1961年、157-159ページ。

の指摘である。

彼は天才を、「意のままに再び見出された幼年期」と定義した。彼にとっては、「子どもはすべてを新しさのうちに見る。子どもはいつも酔っている」。だが、彼は、この酔いがきわめて特殊な類いのものであることを言おうとしない。確かに、子どもにとってはすべてが新しいものだが、それはすでに他人によって見られ、名付けられ、分類されたものである。[...] 未知の領域を探検するどころか、子どもはアルバムをめくり、植物図鑑を調べ、自分の土地を見回っている。幼年期のこの絶対的な安全性に、ボードレールはノスタルジーを抱いているのだ<sup>72)</sup>。

サルトルからすれば、子どもが発見する世界の新しさは何ら新しくなく、先行世代によってとうの昔に発見され、検討され、文献に知識として穏やかに収まっているものである。大人によって整頓され、安全性を確認された世界を発見する子どもの歓びを「意のまま」にすることが、成年ボードレールにとって芸術家の「天才」であるというなら、その発見が真に創造的なものでありうるかは疑問となる。サルトルは、安全地帯における「天才」という芸術家の自己欺瞞をボードレールの実人生に見出しつつ、それを、彼が抱えていたという「有罪感」と次のように関連づける。

確固とした世界の只中でこそ、ボードレールは自分の特異性を確立するのだ。まず彼は、母親と義父に反抗 (révolte) し激昂するなかで、それを提示した。だが、なされたのはまさしく反抗であって、革命的な行為ではない。革命家は世界を変えようと望み、未来に向けて、自らが創造する価値の秩序に向けて、世界を乗り越える。反抗者は、自分が苦しんでいる弊害を無傷のままにとどめようとし、そうして反抗を続けられるようにするのである。彼のうちにはいつも、良心のとがめの元になる

72) Jean-Paul Sartre, *Baudelaire, op. cit.*, p. 60.

ものと、有罪感のようなものがある。彼は秩序を破壊したいとも、乗り越えたいとも思わず、ただそれへの対抗を望むだけである。それを攻撃すればするほど、ひそかに尊重しているのだ。[…] ボードレールは家族の観念を破壊しようとは決して考えなかった。まったく逆だ。彼は幼年の段階を一度も越え出なかったとさえ言えるだろう<sup>73)</sup>。

のちにアルベール・カミュとのあいだで交わされる「革命か反抗か」の論争を先取りするようなこの議論において<sup>74)</sup>、ボードレールに見定められている「有罪感」は、「母親と義父」に体现される家族の秩序、社会に有用な役割を果たす構成単位としての家族の秩序に「反抗」することから自らの「特異性」を引き出すボードレールが、己の存在意義を家族の秩序に全面的に依存している事実に所以を求められる。ボードレールはそうした依存の解消を欲するのではなく、反抗者として咎められ、譴責されることを欲するのであり、そうした仕方がかえって、秩序に保護される少年であり続けようとするのである。サルトルは、ボードレールのこの「特異性」を、道徳感情のありように結びつけ、こうも述べている。「意識的に〈悪〉をなすことによって、そして、〈悪〉における意識=良心によってこそ、ボードレールは〈善〉に加担する」、「彼の行為と並の罪人の行為の違いは、黒ミサを無神論から区別するようなものである。無神論者は神を気につけない […] が、黒ミサの司祭は神を、愛すべきであるがゆえに憎み、敬すべきであるがゆえに

73) *Ibid.*, p. 58–59. ここでは *révolte* を、ボードレールの詩の章題「反逆」とは敢えて区別し、「反抗」と訳出する。その理由については、次段落の記述、ならびに本章末尾の記述を参照されたい。

74) サルトルとカミュの論争時、バタイユはカミュを擁護し、以下の論文を発表している。Georges Bataille, « L’Affaire de “L’Homme révolté” » (1952), O. C., t. XII, *op. cit.*, p. 230–236. この論争の経緯とバタイユの反応とを考察した研究として、以下を挙げておく。伊藤直「バタイユとサルトル——カミュの「歴史に対する反抗」を巡って」、『別冊水声通信 バタイユとその友たち』所収、前掲書、307–323 ページ。

愚弄する」<sup>75)</sup>。かくして、ボードレールの「有罪感」と「悪」は、既成秩序の堅持とそれへの敬愛を前提とした、終わりなき反抗期という特異性によって説明され、それとの対照において、既成秩序の打倒と新秩序の建設に踏み込む「革命」の創造性が暗黙裡に言祝がれもする。ボードレールが「反逆」の詩で「民衆の闘争の論理」を謳いあげたのだとしても<sup>76)</sup>、サルトルからすれば、この詩人の一連の振る舞いは、そうした「反逆」——その意は、マルクス主義の文脈に拘らなければ、「革命」に通じるだろう——の名に値しない、幼稚な駄々に過ぎないのである。

バタイユの『文学と悪』序文に眼を戻そう。バタイユがカフカを真摯な担い手とした文学の有罪性は、サルトルがボードレールに見出した「有罪感」、善悪の彼岸を目指さず、善の秩序を是認しながら己の悪を際立たせる姿勢に伴う感情に通じるものである。バタイユにとって、善の秩序はすなわち「行動」の秩序、「大人たちの社会」における「有用な行動」の秩序である<sup>77)</sup>。カフカの「誠実さ」は、「行動の必然性を前にして」「己にいかなる権利も認めなかった」ことに察知されるのであり、もはや、サルトルがボードレールの特徴とした「反抗」の積極性すらも失われ、むしろ、「行動」による一方的な有罪判決——これはまさに、カフカの小説『判決』での父親から息子への自死命令を題材として、『文学と悪』のカフカ論で考察されることになる——を受けての「有罪感」が問題となってゆく。カフカが言挙げされることから窺われるように、発端をなす、ボードレールの「再び見出された幼年期」の有罪性は、この詩人の「特異性」だとしてサルトルの議論から一見すると抜け出して、詩全体の有罪性、文学全体の有罪性として、バタイユによって考察されていくことになるのである。

実際、『文学と悪』のボードレール論では、サルトルの「ここで悪と詩の関係に注意しよう。詩が[……]悪を対象とする場合には、制限された責任しか持たない二種類の創造行為が結びつき、混じり合って、今度こそは悪の華

75) Jean-Paul Sartre, *Baudelaire*, *op. cit.*, p. 81.

76) 鈴木啓二「『聖ペトロの否認』再読」、前掲論文、14 ページ。

77) Georges Bataille, *La Littérature et le mal*, *op. cit.*, p. 275.

を手にするようになるのである。だが、〈悪〉の確固たる創造とは「…」、〈善〉を受け容れ、承認することである」という文言を含む一節が参照され、ひとりボードレールにとどまらない「悪と詩の関係」の考察の端緒が示されながらも、それ以上展開されなかったことが慨嘆される。そして、その欠落を補うという体裁のもとで、論述が進められるのである<sup>78)</sup>。バタイユは、「サルトルが詩と道徳の基礎を問いに付す一問題を単純化した」<sup>79)</sup>、あるいは、「サルトルの下手際さが提起する問題」<sup>80)</sup> などという言い方で、自らの論考がサルトル批判の意図を持つことを明示しつつ、サルトルとボードレールとの対比を、行動＝散文と詩との対比に重ね合わせて、次のように述べている。

ボードレールは、成熟した人間として、つまり、散文的な人間として行動することを断固として拒むのだが、彼の恥ずべき態度を自らのものとして担わないのであれば、それを非難するのも当然だろう。サルトルは正しい。ボードレールは子どものように、不届き者であることを選んだのだ。だが、彼を生憎だと決めつける前に、なされたのがどういった種類の選択なのかを問わねばならない。それは力不足の結果なのか？ 嘆かわしい間違いに過ぎないのか？ 反対に、力が有り余って起こったのか？ おそらくは悲惨な仕方、けれども、決然としたやり方で？ このようにさえ問おう。こうした選択が、本質的に、詩の選択なのではないか？ それが人間の選択なのではないか？  
これこそが私の本の意味なのだ<sup>81)</sup>。

バタイユは、成熟した大人が持つ行動の価値観からは唾棄すべき、ボードレールの児戯的反抗が、無力さの帰結ではなく、覚悟を持って選び取られた可能性を示唆しながら、それを「詩の選択」として一般化するのみならず、

78) *Ibid.*, p. 190 ; Jean-Paul Sartre, *Baudelaire, op. cit.*, p. 82–83.

79) Georges Bataille, *La Littérature et le mal, op. cit.*, p. 191.

80) *Ibid.*, p. 192.

81) *Ibid.*, p. 192–193. 強調は原文。

「人間の選択」というスケールに広げ、その必然性を示すことが自身の本の目的であるとさえ言い切っている。したがって、以降の論述は、ボードレールの立場が詩を代表するものであること、さらには、人間を代表するものであることを示し出す試みとなる。

とはいえ、そこでのバタイユの筆致は、「悪と詩の関係」という、彼自身発展させることの重要性を主張した論点にすぐさま迫るのではなく、自ら認めるところの「長々とした哲学的説明」に入っていく<sup>82)</sup>。バタイユは、サルトルが、「ボードレールは世界と独特な距離を保っていて、その距離は私たちのものとは異なる」とし、世界との通常の（非ボードレールの）距離のありようを説明するために、「この、未来による現在の規定、まだないものによる、実存するものの規定こそ、哲学者たちがこんちに超越と呼んでいるものである」と述べていることに注目する<sup>83)</sup>。バタイユからすれば、こうした「超越」の視点は「日常のヴィジョン」であり、他方、ボードレールの「詩的なヴィジョン」は、「主体の客体への融即関係」に通じるものであって、後者は「現在の」であり、「当てにされた未来など、それ〔融即〕を規定するためには用なし」だとされる<sup>84)</sup>。こうして、サルトルの用いる「超越」という「語彙の不十分さ」により<sup>85)</sup>、詩人ボードレールの世界観とそれに基づく振る舞いが十全に捉えられていないことが主張されるのである。この批判が妥当かは措くとして、バタイユはここで、かつて「罪に関する討論」で圧倒された哲学者サルトルに対し、語の運用をめぐる正面から哲学論議を仕掛けようとしている。その結果、「悪と詩の関係」という論点が一度後景に

---

82) *Ibid.*, p. 194.

83) *Ibid.*, p. 193–194 ; Jean-Paul-Sartre, *Baudelaire, op. cit.*, p. 43.

84) Georges Bataille, *La Littérature et le mal, op. cit.*, p. 196. 強調は原文。社会学者・人類学者のリュシアン・レヴィ＝ブルジュルから借用された「融即 (participation)」の概念については、『文学と悪』邦訳の訳注における山本功の以下の説明が簡潔で要を得ている。「ひとつのものがそのものでありながら同時に他のものであると見る原始人の論理以前の直観」(『文学と悪』山本功訳、ちくま学芸文庫、1998年、90ページ)。

85) Georges Bataille, *La Littérature et le mal, op. cit.*, p. 194.

退くばかりか、「再び見出された幼年期」としての文学の定義、「結局は […] 自らの有罪を認めなければならなかった」ものとしての文学の定義が、サルトルの提起した、「〈悪〉の確固たる創造とは […]、〈善〉を受け容れ、承認することである」というテーゼとの関係で読まれなければならないことが、反論の身振りに紛れて見えづらくなってもいる。

実のところ、未来時の現在時に対する優位を含意する「超越」に対して、バタイユが「現在的」な「融即」を提起し、「詩的ヴィジョン」の特別性を際立たせようとしながらも、その議論が結論するのは、詩が「融即」を実現することの不可能性なのである。バタイユは、この不可能性を浮かび上がらせるために、サルトルが用いる「存在 (être)」と「実存 (existence)」の区別を導入する。サルトルにおいて、「存在」は「事物」の「頑固で厳密に決定されたあり方」を指し、「実存」は「意識と自由のあり方」、「自分で自分を創り出し」「自らによって自分の存在を支える」あり方を指す<sup>86)</sup>。サルトルによれば、ボードレールは事物のように「存在」することを望みながらも、それが自らの創造物であることを同時に欲し、結果として、「存在と実存と、いずれも徹底して生きることができないし、そう望みもしない」。「彼は絶えず引き裂かれる意識、良心のとがめ = 悪しき意識 (mauvaise conscience) を持つことを選んだ」というのがこの哲学者の判定である<sup>87)</sup>。バタイユは、サルトルのこの見解を、詩に期待される「主体と客体の融合、人間と世界の融合」の不可能性を指摘するものと読み替えて、次のように言う。

この不可能性を、サルトルは実に正しく表象しており、詩人の悲惨について、それは存在と実存とを客観的に結びつけようとする気違いじみた欲望だと語っている。 […] 不変のものと滅びゆくもの、存在と実存、

86) Jean-Paul Sartre, *Baudelaire*, op. cit., p. 90. この二つの概念に関する、邦訳者佐藤朔の明快な説明を以下に挙げておく。「サルトルによれば、実存することは自分で自分の客観性を創造することであり、存在するとは自分が他人から見て、物になることである […]」(佐藤朔「あとがき」、前掲論文、160ページ)。

87) Jean-Paul Sartre, *Baudelaire*, op. cit., p. 90-91.



客体 = 事物 (objet) と主体 (sujet) の綜合 (synthèse) を詩は追い求めるのだが、それによって詩は逃げ道をなくし、制限され、不可能なものの王国に、不満足の世界に化してしまうのである<sup>88)</sup>。

「存在と実存」が「不変のものと滅びゆくもの」にパラフレーズされるのは妥当としても、それが「融即」との絡みで「客体 = 事物と主体」の関係に敷衍されるのは、サルトルの文脈に忠実とは言えない。また、ボードレール個人の存在様態として示されたものが詩全般の宿命のように語られるのも、いささか性急である。バタイユはそうした仕方で、サルトルの存在／実存の二項対立を自らの理路に取り入れるのであり、したがって、この「長々とした哲学的説明」なるものは、サルトルの概念の不備を指摘するかに見せながら、実際にはそれを、詩をめぐる自身の問題系に引き寄せて換骨奪胎し、横領することで成り立っている。そもそも、バタイユが断定的に述べている、「主体と客体の融合、人間と世界の融合」を詩がもたらすことの不可能性は、存在／実存という二項対立の助けがなければ、論証の舞台にすら登場できない。バタイユは、「この融合は、不可能なように思われるのだ！ (elle est, semble-t-il, impossible !)」として、感嘆符を *sembler* の不確実さで相殺しながら、判断の根拠を示すことなく、すぐさまサルトルの解釈格子に頼り出すからである<sup>89)</sup>。バタイユのボードレール論が、サルトルの考察を批判対象として要請するだけでなく、それに立脚してのみ成立する作りになっている事実は、重く見なければならぬ。

論考の終盤で、バタイユは、『内面の日記』におけるボードレールの「我々は絶えず、時間の観念と感覚に打ちのめされている。この悪夢から逃れるには […] 二つの手段しかない。快楽か、労働か。快楽は我々を消耗させる。労働は我々を頑健にする。選択すべきだ」という一節を引き、「経済学」の見地から読解を加える<sup>90)</sup>。いわく、「快楽」を味わうには、「我々の資

88) Georges Bataille, *La Littérature et le mal*, *op. cit.*, p. 196.

89) *Ibid.*, p. 196.

90) *Ibid.*, p. 203.

源の非生産的な消費」が不可避であり、これが「消耗」に対応する。他方、「労働」は「我々の資源の増大という効果を生む」<sup>91)</sup>。問題となっているのは、「現在私にこれだけの資源があるとして、それを消費すべきか、増大させるべきか」の選び取りであり、後者は「生産」という言葉でも表現される。そして、この「労働」と「快樂」、「生産」と「消費」という対立が、「神」と「悪魔」の対立、「善」と「悪」の対立に結びつけられていく<sup>92)</sup>。バタイユからすると、これは個人の選択の問題ではなく、歴史の展開のなかで社会が迫られる選択の問題であって、その点を見落としているのが「サルトルの分析の欠陥」だとされる<sup>93)</sup>。ボードレールは「労働することの拒否」を担ったのだが、それが可能になるのは、「労働の収益を最大限、生産手段の増大に割り当てる、飛躍的發展の渦中の資本主義社会」のなかであって、それに対する所作としてなのである<sup>94)</sup>。かくして、ボードレールの態度は、一個人の態度としてではなく、社会状況における文学＝詩そのもののありうべき態度として、以下のように解釈される。

文学的探求は、この段階になって、妥協の可能性に制限されることを止めたのだ。[...] サルトルの分析が浮かび上がらせる助けとなるが、ボードレールは、ほかの人たちが反逆 (rébellion) から引き出したものを、自分の努力の空しさから引き出したのである。[...] シャルル・ボードレールの拒否は、最も深刻な拒否だ。というのも、対立する原理を肯定するものではないさきからである。[...] こうして詩は、外部から与えられた要請から、意図の要請から離れて、ただ内面の要請だけに応じるものとなった [...]。詩のこの成熟した (majeure) 決意には、弱い個人の選択とは別のものが存在している<sup>95)</sup>。

---

91) *Ibid.*

92) *Ibid.*, p. 204.

93) *Ibid.*

94) *Ibid.*, p. 205.

95) *Ibid.*, p. 207–208. 強調は引用者。

引用部の考察に先立ち、バタイユの断定とは異なって、ボードレールの所作に文学の社会に対する応答という歴史的な意味を見出す視点が、他ならぬサルトルのものであることを指摘しておくのが公正だろう。サルトルは、200年にわたって貴族の庇護を受け、ブルジョワジーへの軽蔑を養い、知識人と自認するようになった文学者たちが、19世紀に至って貴族の庇護を失い、ブルジョワジーの利害を体現するよう迫られたときに、「象徴的な階級脱落」を果たそうとしたと指摘する。たとえばフローベールは、地方の富裕ブルジョワジーでありながらもその身分と無縁であるかのように振る舞い、セルヴァンテス、ラブレール、ウェルギリウスといった過去の大作家たちの系列に自らを位置づける。そうして「没落した貴族階級を精神的集団によって置き換え」、その一員だと自己規定することによって、超俗的な「知識人の使命を保った」のであり、ボードレールは同じ姿勢を「個人主義」的に徹底したものと評価される<sup>96)</sup>。こうした歴史的視座からの分析のなかで、芸術家が自らを組み入れようとする集団の位相が、「生産と消費のサイクルの外側」、「非生産的な活動面」といったバタイユ的な語彙で説明されている事実も見逃しがたい<sup>97)</sup>。無論、互いの著述を知悉していたはずのこの両者に、参照や引用の故意の言い落としを勘ぐったり、着想の先後を云々したりすることには意味はない。ただ、両者が自覚したとも限らない、互いの関心領域と思索手段の根本的な近しさを、ここから看取しても不当ではないだろう。さきのバタイユの引用部に戻ると、際立つのは、ボードレールを「反逆」の不在によって特徴づける観点である。ボードレールの労働に対する「拒否」は、対立する価値を上位に位置づけようとする「反逆」とは無縁であり、それ自体のほかに目的を持たない純粋な「拒否」である。「幼年時代が支配をするならば、それに真実があるだろうか？」という序文の反語との対応を、ここに

96) Cf. Jean-Paul Sartre, *Baudelaire, op. cit.*, p. 160–165.

97) *Ibid.*, p. 161. サルトルの『ボードレール』の刊行は、バタイユの経済学的思索の最初の（そして公刊物としては結果的に最後の）集大成である『呪われた部分』（1949）の刊行に先立つが、先駆にあたる論考「消費の観念」は1933年に発表されている。

見出すことができるだろう。気をつけなくてはならないが、この「反逆 (rébellion)」の不在は、サルトルが「反抗 (révolte)」という言葉で——「革命」との対比において——言い表した事態だということだ。「対立する原理を肯定するものではないささかもない」、大人への「反逆」の不在であり、「善」の転覆を意図しない、「悪」としての文学とは、かくして、サルトルのボードレールに、小児の飽くなき「反抗」に重なっていく。にもかかわらず、その、行動＝労働の価値観を前にした有罪性、「再び見出された幼年期」の有罪性は、「詩の成熟した＝大人の決意」として自立性を喝破され、つまりは、社会的な意義を持つものとして提示されようともするのだ。ボードレール論はこれをもって閉じられるが、以上の認識から出発して、『文学と悪』では、文学と詩の、行動に決して立ち向かわず、同時に決して屈もしない、抜き差しならぬ営みとしての性質がことさら肉薄されていくことになる<sup>98)</sup>。現代のボードレール——文学——は、白日のもとで裁きを下され、それを甘受するのだが、裁きに足る年齢に達していたという事実、その成熟は、かえって裁き手をたじろがせもするのである<sup>99)</sup>。

#### 4. 終わりに

かつて、バタイユが「夢の同胞」というイメージを借用して表明したのは、「科学の人間」、「虚構の人間」、「行動の人間」という三種に分離した人間の実存を統合し、「実存の全体性」を取り戻す希望であった。虚構と行動の通底を謳うものと理解されたボードレールの詩句を一つのモチーフとして、バタイユは、虚実が一体となって世界のありようを変容させる、そのための手立てを「神話」に基づく人々の結集に見出し、「悲劇の帝国」の建設に向け

98) ここでとりわけ念頭に置いているのは、『文学と悪』のカフカ論である。これについては以下も参照されたい。石川学『ジョルジュ・バタイユ——行動の論理と文学』、第3章第4節「権利の不在から死ぬ権利へ」、前掲書、204–225 ページ。

99) カフカ『判決』における、父親から息子への自死命令を、あらためて思い起こしたい。

て、社会学という科学の知見も合わせて駆使することを試みた。この目論見が潰えたあと、バタイユが目当てにしたのは、有用な行動、生産的な行動に対する科学の盲目的な奉仕という事態であり<sup>100)</sup>、さらには、文学の屈従という事態だった。シュルレアリスムが現実から乖離した観念論としてサルトルによる批判を受けたとき、バタイユはこの批判を、行動の名における文学への有罪判決と理解した。それが、自分が以前シュルレアリスムに投げかけた批判と似ていなくはないことをバタイユが自覚していたかどうかは、ここで論じるものではない。いずれにせよ、戦後のバタイユは、そうした文学への糾弾に疑義を呈することを選んだ。だが、有用性への従属の拒絶、「労働することの拒否」を、行動の支配を肯んじない文学の特質と見なす見地からして、文学を行動に「対立する原理」として打ち出すことは、つまり、文学を行動に對抗する行動とすることは、許容できない選択肢だった。こうして、行動からの裁きを甘受することを通じ、行動とは無縁な意識の確かな実在を、有罪者として世界に知らしめる文学の役割が探られていく。バタイユは『文学と悪』に関連して、ボードレールとともにカフカの重要性を自ら強調しているが<sup>101)</sup>、カフカ論で取り上げられる『判決』（1913）では、父親が主人公ペンデマンに対して、次のように命令する。「自分のほかにも世界があることを思い知ったか。これまでおまえは自分のことしか知らなかった！ 本来は無邪気な子どもであったにせよ、しょせんは悪魔わるのような悪だったわけだ！——だからこそ知るがいい、わしは今、おまえに死を命じる、溺れ死

100) この主題が最も直接的に扱われる論考として、「広島に住民たちの物語」（1947）を挙げておく。ここでは、戦争や原爆開発を事例に、「国家の理性的な利害」の優先が破局的暴走に帰結する必然性が検討されている。Cf. Georges Bataille, « À Propos de récits d'habitants d'Hiroshima », O. C., t. XI, *op. cit.*, p. 172–187.

101) Georges Bataille, *Georges Bataille : Une liberté souveraine*, Textes et entretiens réunis et présentés par Michel Surya, Paris, Farrago, 2000, p. 136. この事実については、井岡詩子が以下で注意を促している。井岡詩子『ジョルジュ・バタイユにおける芸術と「幼年期」』、月曜社、2020年、101ページ。

ね！」<sup>102)</sup>。第二次大戦後の世界において、行動はもはや、ボードレールの義父オーピックの悠長さを捨て、いわんや愛すべき母カロリーヌの装いを捨て、無用なものの排除をためらわない冷酷さを厳然と行使し始めたのだ。この新たな父の顔を、バタイユがサルトルに見出したと言え、過言だろうか。けれども、ボードレールの終わりなき反抗期を暴いたサルトルが、その矛先をシュルレアリスムに、そしてカミュへと向けていくとき、次第にベンデマンの父——あれほどまで、概念と理路の意匠を借り受けた、変貌してなお「愛している」父？<sup>103)</sup>——の姿が、バタイユの目に映りだしたかもしれないのである<sup>104)</sup>。こうした見立てとともに、『文学と悪』最終章を構成するジュネ論——サルトルの『聖ジュネ』（1952）が組上に載せられる——を検討するのも、今後、魅力的な課題となろう。

---

102) フランツ・カフカ『判決』、『カフカ短篇集』池内紀編訳、岩波文庫、1987年、32ページ。一部表記を変更した。

103) 橋の欄干から落下するベンデマンの最後の言葉はこうである。「お父さん、お母さん、ぼくはいつもあなた方を愛していました」（同書、同ページ）。

104) マチルド・ジラルドは、『文学と悪』のカフカ論の趣旨が「拒否する少年時代の肯定」にあるとし、そうした姿勢をサルトルや哲学者全般と対立的に捉えながら、バタイユ思想を検討しようとしている。Cf. Mathilde Girard, « Le Philosophe ne danse pas, il pense. », *Chimères*, n° 64, 2007, p. 56–77.